原 著

上顎性粘液腺囊腫(新稱)ニ就キテ

醫學博士 久保猪之吉

„Schleimdrüsenzyste des Oberkiefers“ von Prof. Dr. Ino. Kubo, Fukuoka, 1920.

429

予ハ大正五年(一九一六年)三月以來外觀上、上顎齒牙囊腫ニ酷似シテ、シカモ上顎齒牙囊腫トハ全ク異ル一種ノ囊腫ヲ發見シタリ、今日ニ至ル迄八回(六人ノ患者中兩側ニ來レルモノ二名アリキ)ヲ實驗シ從來注目セラレザリシ新種ナルコトヲ斷言スルニ至レリ。予ハ更ニ大正五年三月以前ニ於テモ此ノ種ノ腫瘍ガ上顎齒牙囊腫ノ中ニ誤ツテ數ヘラレ其中ニ齒牙ノ痕跡ヲモ發見セラレザリシモノヲ病臨日誌ニヨリテ悉ク再檢査シタリ、シカルニ齒牙囊腫トノ區別點ヲ精密ニ知ラザリシ以前ナルヲ以テ果シテ予ノ今記載スル新種ニ屬スルカ否カラ斷言シエズ、予ハ此報告ヲ大正九年四月ノ大日本耳鼻咽喉

科學會總會ニテ演說シタルニ岡田博士臨床及大坂醫科大學並ニ京都醫學專門學校ニ於テモ實驗シタルコトアルヲ述ベラレ予ノ演說ニ追加セラレタリ、故ニ注意スレバ屢遭遇スル疾患ニシテ齒牙囊腫ト混同セラルベキ性質ノモノニアザルナリ。

此新囊腫ガ上顎齒牙囊腫ト酷似スル點ハ次ノ如シ。

- 一、鼻唇溝外側部ニ於ケル圓形ノ膨隆
- 二、下鼻道外側下甲介前端部ニ於ケル所謂ゲルベル氏ノ隆起トシテ現ル、コト
- 三、無痛ノ良性囊腫ナルコト

サレド精細ナル觀察ヲナセバ次ノ諸點ニ於テ異ナリ。

- 一、齒牙囊腫ニ於ケルガ如キ羊皮紙樣捻髮音ヲ呈セザルコト
- 二、鼻腔内ニ於ケル隆起ガ精シク見レバ少シク位置ヲ異ニスルコト
- 三、上顎骨ノ外部ニアリテ梨子狀孔ノ邊緣壓平セラル、コト
- 四、囊腫内ニ齒牙ヲ有セザルコト

五、内容ハ粘液素ヲ含有スルコト

六、手術ノ際周圍ヨリ剝離スルニ常ニ下鼻道前部ノ粘膜ト密著シテ剝離不可能ナリコト

七、囊腫内面ハ粘液腺上皮ヲ被ルコト

今予ハ此等ノ事實ノ説明トシテ各例ヲ略述シ結論ニ及バムトス。

第一例。三十一歳男子、會社員、大正五年三月十四日初診（外來番號九二九）

〔主訴〕 右側鼻唇溝外側部ノ腫脹、頭痛、但腫瘍ハ無痛

〔病歴〕 約五年前ヨリ鼻ノ左ニ傾クコトヲ注意セラレタリ、自覺的ニハ頭痛ヲ少シク覺ユルノミ

ニシテ他ニ訴ナシ、右側ノ腫脹シタル部ヲ患者自ラ鏡ヲ取りテ見ルコトヲ得タリ、又右側口腔犬齒窩部ニ指頭ヲ入レテ自ラ腫瘍ヲ觸ル、コトヲ得タリ。

〔現症〕 右側鼻唇溝ノ外側、犬齒窩部著シク腫脹ス、鼻唇溝消失ス、鼻尖左ニ傾ク、鼻腔ヲ検査

スルニ少シク肥大セル下甲介ノ前方ニ當リテ圓形ニ緊張腫脹シタル腫瘍アリ下甲介ノ一部ハ爲ニ被ハレテ見エズ、之ヲ壓スルニ明カニ波動ヲ呈シ一見囊腫ノ如シ、更ニ口唇ヲ舉上シテ檢スルニ又腫瘍ノ一部ヲ口内ヨリ見ルコトヲウ、但シ何レノ部ニモ骨ヲ觸レズ、鼻腔内ノ囊腫様ノ部ヲ試穿シタルニ粘稠ナル帶黃綠色ノ半透明ノ粘液ヲエタリ、故ニ囊腫ナルコトヲ確メタリ。

徹照法ニヨリテ右側囊腫部ノ明カニ左側ヨリモ透明赤色ナルコトヲ見タリ。X光線検査ニテ腫瘍部ニ暗影ヲ見タリ。

原 著 久保——上顎性粘液腺囊腫(新稱)ニ就キテ

齒列ハ尋常ニシテ口蓋ニ變化ナシ。

〔假診斷〕

右側齒牙囊腫?

〔手術〕

千九百十六年三月十七日、局部麻酔ノ下ニ口腔ヨリ手術ス、囊腫ノ囊ハ口腔粘膜ノ横切線ヲ施シタルニ囊腫ハ膜ノ直下ニアリ、漸次剝離スルニヨリ剝離セラレタリ、然ルニ鼻腔粘膜ノ部ニ至リ其癒著甚シク如何ニシテモ剝離スルコト能ハズ、鼻鉗ヲ以テ銳利ニ周圍ヨリ切斷シテ摘出シタリ、上顎竇ヲ少シク開キタルニ上顎トハ全ク無關係ナリ、腫瘍抽出後少シク鼻底及側壁ニカケテ凹陥ヲ生ジタルモ「ガトゼ」細片ヲ入レ鼻腔ニ出シタルマ、トナシ口腔ノ創口ハ縫合閉鎖シタリ。

〔腫瘍〕

ハ楕圓形ニシテ拇指頭大、内容液ハ粘稠、粘液性黃綠色半透明ナリ、赤血球及多角形上皮細胞、多核性白血球ヲ有ス「コレステアリン」結晶板ヲ見ズ、

〔概要〕

此例ハ最初上顎齒牙囊腫ノ診斷ヲ下シタルヲ以テ予ノ新タニ發見シタルガ如キ別種ノ囊腫ナラムトハ少シモ思ハザリシナリシカルニ手術ノ結果、囊内ニ齒牙ナク又骨ノ表面ニ坐スルノミニシテ骨ノ内部トハ全ク關係ナキヲ以テ齒牙囊腫ノ一異形ナラムト想像シタリキ、シカルニ其後ニ來リタル例ヨリ逆ニ調査シテ全ク齒牙囊腫トハ別種ノモノナルコトヲ知リエタリ。

第二例。

二十五歳ノ婦人、農婦、大正六年(一九一七年)十一日三日初診(外來番號五〇九七)

第一圖 (二十五歳ノ女)
術前、右患側鼻唇溝チ欠キテ腫脹ス、(↑) 腫瘍部

第二圖

術後、右側ニモ鼻唇溝チ生ズ

原著 久保——上顎性粘液腺囊腫(新稱)ニ就キテ

〔主 訴〕

右鼻翼附著部ノ腫脹、鼻閉鼻聲、

〔病 歴〕

幼少ノ時、時々、鼻閉アリ、サレド

鼻漏ナシ、十月ノ始ヨリ漸次腫脹ヲ認ム、無痛ナリ。

〔現 症〕

第一回ニ於テ見ルガ如ク左側鼻唇溝

ハ明了ナルモ右側ハ全ク消失シ、少シク隆起ス、

鼻腔ヲ檢スルニ腫脹ハ右側下甲介ノ前端ノ一部ヲ

被ヒ更ニ鼻底ニ擴ル、之ニ一致シテ口腔内、大齒

窩部ニモ亦腫脹ノ一部ヲ觸ル、コトヲウ、之ヲ觸

ル、ニ弾力性柔軟ニシテ骨部ヲ有セズ、波動アリ

齒列尋常ニシテ口蓋ニ變化ナシ。

ワ氏反應陰性、ビ氏反應弱陽性ナリ。

〔假 診 斷〕

右上顎囊腫性腫瘍。

〔手 術〕

十一月十九日局所麻醉ノ下ニ手術ヲ

口腔ヨリ行フコト前ノ如シ。上顎骨ノ前面ニハ全ク異常ナシ、腫瘍ヲ剝離スルニ骨トハ無關係ニシテ唯鼻腔粘膜トハ密著シテ離レザルガ故ニ下鼻道ノ前方ニ於テ缺ヲ以テ鼻粘膜ト共ニ切り離ス、初期縫合前ノ如シ、術後ノ經過ハ極メテ良好ニ十月三十日全治退院スルニ至レリ、右側鼻唇溝明カニ現レ來レリ(第二圖)

〔腫瘍〕 腫瘍ハ橢圓形ニシテ左右徑二九仙米アリ囊腫ヲ完全ニ取り出シタルヲ以テ内容ヲ検査セザリキ、組織的ニ検査ヲ行ヒタルニ囊腫ノ壁ハ一般ニ出血竈多シ、鼻腔ニ面セル方ハ圓柱氈毛上皮ニシテ基礎膜少シク肥厚ス、基質ニハ多數ノ腺ヲ有シ周圍ニ圓形細胞浸潤アリ、腫瘍ノ内面ハ二層乃至三層ノ方形細胞ユルキ波狀ニ並列シ腺ノ擴大シタルモノニ過ギズ、

〔概要〕 予ハ比例ニ於テ初メテ上顎竇又ハ上顎骨以外ニ於ケル囊腫ノ存在スルコトヲ知り、シカモ其出發點下鼻道前方ノ粘膜ニアルコトヲ考ヘタリ、組織的検査ニヨリテ粘液腺ノ擴張シタルモノナルコトモ知レリ、予ハ此例ニ於テ上顎齒牙囊腫トナスコト能ハズ、上顎ノ囊腫性腫瘍トナセリ。

第三例。 四十歳ノ產婆、大正七年(一九一八年)五月六日初診(外來番號二二八四)

〔主訴〕 右鼻翼部腫脹、但無痛ナリ、

〔病歴〕

千九百十七年三月即チ約一箇年前ヨリ右ノ鼻翼部附近ニ腫脹ヲ認め、同時ニ疼痛アリタ

(女ノ歳十四) 圖三第
ス脹腫部ノソキ欠ヲ溝唇鼻側右
(甲)

(乙)

リ、口中ヨリ穿刺ヲ受ケ腫瘍ノ内容ヲ出シテヨリ無痛トナレリ、六月十二日口内ヨリ切開手術ヲ受ケ一時輕快シタルモ其後漸次腫脹シテ現狀ニ達ス、夕方ニ至レバ朝ヨリモ大サヲ増スト云フ、鼻漏出血等ナシ。

〔現 症〕

右鼻翼外側部明カニ腫脹シ鼻尖僅カニ左方ニ傾ク、鼻唇溝ハ右側ニアリテ消失ス、鼻腔ヲ見ルニ右側下甲介ハ腫脹ノ爲ニ隠レテ其部見エズ、鼻底粘膜隆起ハ下甲介前端トノ間ニ當リテ腫瘍ノ出ヅルヲ見ル、顔面ニ於テ計算スルニ鼻翼外界ヨリ腫瘍ノ外境迄

〇、五、上下ハ約二、〇仙米大ナリ(第三圖甲、乙)

原著 久保——上顎性粘液腺囊腫（新稱）ニ就キテ

—二—

齒列、前方内門齒部ニハ上下共ニ齙齒アルモ齒牙ノ數ニ異常ナシ、口蓋ニ變形ナシ。

ワ氏反應陰性ナリ

徹照法ニテ兩側暗黒ナレドモ右側ノ方餘計ニ暗シ、X光線寫真ニテ右側ニ暗影アリ、右側梨子狀孔ノ下外角、少シク壓平セラル、ヲ見ル、

〔假診斷〕 上顎囊腫、

〔手術〕 五月八日前法ノ如ク手術ス、粘膜ヨリヨク剝離スルモ鼻腔粘膜ト癒著スルヲ以テ鋏ヲ以テ切除ス。初期縫合前ノ如シ、上顎骨ノ鼻孔邊緣ハ下部ニ於テ壓平セラル。

〔腫瘍〕 縦ニ長キ橢圓形ノ囊腫ニシテ上下二、三仙米、左右二、〇前後一、二仙米大ナリ、内容ハ粘稠ナル液ニシテ「コレステアリン」結晶板ナシ、重球菌ヲ認ム。

〔概要〕 前例ト同様ニ癒着ハ鼻腔粘膜ニアリ、而シテ出發點ハ鼻底粘膜隆起ト下甲介前端トノ間ニアルコト明了ナリキ。此例ニ於テ穿刺又ハ單純ナル切開ニテハ治セズ。再發スルコト注意スベシ、又X光線検査ニテ既ニ上顎骨ノ梨子狀孔下緣即鼻底前方ニ於テ腫瘍ノ爲ニ壓迫ヲウケテ變形シタルコトヲ見タルハ興味アリ、手術ニ於テ之ヲ證明スルコトヲ得タリ。

第四例及第五例。 二十四歳ノ官吏ノ妻、大正七年（一九一八年）六月四日初診（外來番號二七一

八)、此例ハ兩側ニ來リタルヲ以テ同一人ナレドモ二例ニ數ヘタリ。

〔主 訴〕

兩側鼻翼部ノ疼痛及鼻漏、

〔病 歴〕

十四、五歳ノ頃ヨリ鼻漏頭痛アリ、千九百十六年夏頃ヨリ千九百十七年春迄鼻洗ヲ受タリ。二、三年前ヨリ鼻翼附著部ノ所ニ(側不明)不斷鈍痛アリ、指頭ヲ以テ之ヲ弄スル習慣アリタリト云フ。

〔現 症〕

兩側鼻翼部殊ニ右側部著シク腫脹シ鼻唇溝左右トモニ消失ス。(第四圖)

今指頭ヲ以テ患者ノ鼻頭ヲ擡グルニ右側鼻孔ノ外側下隅ニ於テ大ナル腫瘍アリ、鼻孔ノ三分二ヲ閉塞ス、而シテ左側鼻孔ノ外下隅ニ於テ小ナル腫瘍ノ突隆スルヲ見ル、下甲介ハ兩側共ニ一部分ハ此腫瘍ニ被ハレテ見エズ、ヨク注目スレバ橢圓形ノ腫瘍ガ外下方ニ斜ニ皮下ニ存スルコトヲ知リウベシ、即腫瘍ノ境セラル、輪廓ハ淺キ溝トナリテ外皮上ニ現ル(第五圖) 此隆起ハ壓スルニ羊皮紙樣捻髮音ナシ、

鼻腔ヲ檢スルニ腫瘍ハ右側ニ於テ著シク大ナリ壓スルニ波動ヲ感ズ、而シテ壓スルニ抵抗ナシ、中鼻道ニ於テ粘液性膿汁アリ、而シテ小指頭大ノ鼻茸ヲ見ル、左側ノ腫瘍ハ稍小ナリ、中鼻道ニ粘液性膿汁ヲ見ル、

原著 久保——上顎性粘液腺囊腫(新稱)ニ就キテ

第四圖 (二十四歳ノ女)

術前、兩側鼻唇溝ナ欠ク、

第五圖 (二十四歳ノ女)
術前、腫瘍ナ兩側ニ見ル、(↑) 腫瘍、

第六圖 (二十四歳ノ女)

右側、腫瘍抽出(手術中)腫瘍ノ爲ニ壓平セラレタル上顎骨、

右側上顎竇ヲ洗滌スルニ多量ノ膿汁アリ、左側亦然リ。

齒列、口蓋等異常ヲ認メズ。

ワ氏反應モビ氏反應モ陰性ナリ。

〔診 斷〕

兩側性上顎粘液腺囊腫、兩側上顎竇炎、右鼻茸。

〔手 術〕

第一回、右側囊腫、六月十日、前ノ如ク口囊ニ於テ切線ハ水平ニ口唇繫帶ヨリ外方ニ犬齒窩ニ向ヒ約三仙米トス、右側囊腫極メテ大ニシテ且頰部ノ皮切ト固著スル爲刀ヲ以テ切斷シユキタルニ既ニ左側ノ囊腫壁ニ觸レテ内容ヲ洩シタリ、内容ハ粘稠ナル混濁シタル液ナリキ、此囊ノ損所ハ左側ノ手術ノタメニ縫合シテ閉鎖シタリ、右側ノ囊腫ハ鼻腔粘膜下ノ癒著部ヲ銳利ニ切斷シ其他聊モ損傷スルコトナク全部トシテ摘出シタリ、摘出後ノ骨面ヲ見ルニ此腫瘍ガ壓迫シタル梨子狀窩ノ下外銳ナル骨端ハ壓平セラレテ扁平トナリ臍ノ如キ一種ノ凹陷トナリタルハ注目スベキコトナリ。

（第六圖）

〔腫 瘍〕

其大サ極メテ大ニ上下二、〇左右二、五前後二、二仙米即大體球狀ナリ其重量六、九「グラム」アリ内容ハ黃色混濁シタル液ナリ。

第二回、左側囊腫七月八日手術、其方法前ノ如シ腫瘍ハ鼻底ニ於テ鼻腔粘膜ト固ク癒著セリ。

原著 久保——上顎性粘液腺囊腫（新稱）ニ就キテ

第七圖（二十四歳ノ女）
右側手術後、右側鼻唇溝現ル、

第八圖（二十四歳ノ女）
兩側手術後、兩側鼻唇溝現ル

一三一

第九圖（二十四歳ノ女）
兩側手術後、兩側鼻腔内ノ隆起失ス、

手術液ノ經過極メテ良好ニシテ七月廿七日全治退院シタリ、初メ右側ノミノ手術ニ於テハ消失セシ
右側鼻唇溝(第七圖)明了ニ現レ來リ左側ノ手術後ハ兩側共明了ニ現ハル、ニ至レリ(第八圖)鼻頭ヲ擡
グルニ何等ノ隆起ヲ見ズ(第九圖)

〔腫瘍〕

小指頭大ニシテ圓形ナリ、其内容ハ綠色ニシテ濃厚粘稠ナリ、反應ハ弱「アルカリ」性、
鏡檢スルニ多數ノ單核白血球ト僅少ノ重球菌アリ。培養基ニハ多數ノ重球菌ヲ見ル、「コレステアリ
ン」結晶板ナシ。

予ハ此内容ヲ化學的ニ檢スレバ、粘液素ヲ證明シエムト考ヘ醫化學教室諸君ノ勞ニヨリテ試驗スルコ
トヲ得タリ、反應ハ「アルカリ」性、「ムチン」(粘液素)反應ハ一、醋酸二、硫酸銅ニヨリテ明ニ證明
スルコトヲエタリ。

〔概要〕

此例ハ兩側ニ對稱性ニ來リ始メテ經驗シタル例ナリ兩側共ニ鼻腔粘膜ト固著シ上顎骨ノ
梨子狀孔邊緣ヲ壓平スルヲ見ル、コトニ右側ニ於テハ腫瘍ノ大ナル丈、骨ノ壓平セラル、コト著明ナ
リ、醫化學檢査ニヨリテ粘液素ノ存在ヲ證明セラレタルコト特記スベシ。

柔カキ波動アル淺在性ノ囊腫性腫瘍ナルコト此例モ他ニ同ジ。骨ノ表面ニ横ルヲ以テ齒牙囊腫ヨリ
モ淺在性ニシテ羊皮紙樣捻髮音ナキ譯ナリ。

第六例。 二十三歳ノ農婦、大正七年(一九一八年)十一月二日初診(外來番號五二三四)

〔主訴〕 右鼻翼附著部附近ノ色素消褪、右鼻孔入口部腫脹右鼻閉、右鼻漏喘息様發作

〔病歴〕 患者ハ右側鼻翼部ノ腫脹シタルヲ何時頃ナリト知ラズ、四、五才ノ頃ヨリ、鼻翼附近ノ

皮膚ノ色素褪色ス、喘息ハ四、五年前ヨリアリ、鼻閉及鼻漏ハ小兒ノ時ヨリ在リタリト云フ。

〔現症〕 右側鼻翼部著シク白色トナル、此部膨隆シテ鼻唇溝消失ス、鼻腔ヲ檢スルニ右側ニ於テ下甲介ノ前端ニ當リ隆起セル腫瘍アリ、下甲介ヲ著シク上方ニ壓迫ス、下鼻道ハ爲ニ殆ド閉塞スルニ至ル、但口腔ノ犬齒窩部ニハ著明ノ隆起ヲ見ズ、膿汁ハ左右鼻腔共ニアリ。

齒列、口蓋異常ナシ、

ビ氏反應、強陽性ナリ、

X光線ニテ右側暗影アリ梨子狀孔下緣壓平變形ス

〔診斷〕 右側上顎性粘液腺囊腫、兩側上顎竇炎、

〔手術〕 千九百十八年一月十九日局所麻醉ニテ行フコト前ノ諸例ノ如シ、骨壁ト囊腫壁トハ全ク

癒著ナシ、唯下甲介ト鼻底トニ癒著シ剝離スルコト能ハズ、故ニ缺ヲ以テ切斷ス、梨子狀孔ノ下外緣

邊ノ先端ハ壓平セラレテ凹陷スX光線寫眞ノ所見ノ如シ(第十圖)

第十圖 (二十三歳ノ女) 右側ハ腫瘍ノ爲ニ上顎骨邊緣ノ壓平セラレタルヲ見ル(↑)
 邊緣壓平セラレ且囊腫ヲ去リタル後骨ノ菲薄トナリタルヲ見ル(X)

原 著

久保——上顎性粘液腺囊腫新稱ニ就キテ

〔腫瘍〕

圓形ニシテ重量二、八「グラム」アリ。内容ハ極メテ濃厚粘稠ナル黃色ノ液ニシテ「コレステアリン」結晶板ナシ、醫化學教室高畑助教ニ依頼シテ「ムチン」ノ有無ノ検査ヲ乞ヒタルニ粘液素ヲ主成分トシテ蛋白質ハ極メテ少シト云フ。手術後ノ經過ハ良好ナリ。二月二日ニ退院歸國ス。

〔概要〕

此例モ特有ナル粘液腺囊腫ニシテ化學的検査ニヨリテ粘液素ノ主成分ナルコトヲ證シ臨牀的ニハ梨子狀孔ノ邊緣尖銳ナル骨端ヲ壓平シ之ニ占居スル骨ト全ク直接ニ關係セザルコト、鼻腔側壁ノ粘膜ト癒著スルコト等皆前例ニ同ジ

第七例 第八例。

五十五才ノ農婦、大正八年九月十六日初診(島原、宮田醫學士ノ紹介ニヨル)(外來番號四一七六)、兩側ニ來リタルヲ以テ二例ニ數フ。

〔主訴〕

左側鼻漏及右側ノ鼻翼部腫脹、

〔病歴〕

八月初旬ヨリ右側鼻唇溝部ニ腫脹ヲ生ジ輕度ノ自發痛及可ナリ強キ壓痛アリ、宮田醫學士ヨリ試穿ヲウケタルニ〇、五立方仙米位ノ膿樣液ヲ出セリ、同學士ハ齒牙ト關係アルモノト思ヒ八月十一日穿刺シタル部即チ口腔大齒窩部ヲ切開シタルニ膿汁ヲ得タリ、後其部ヲ搔把シ「タンボン」ヲ挿入シ爾後約一週間位ニシテ粘膜部ノ創口治癒スルモ分泌止マズ始メ膿性ヲ帶ビタルモノ清澄トナル、又鼻腔ヲ檢スルニ鼻底ノ所ニ當リテ腫瘍アリ創口治癒スルニ從テ此腫瘍増大シ來レリ依テ上顎竇消息

子ヲ以テツヽキタルニ破レテ深ク入り清澄ノ粘液ヲ漏セリ是ニ於テ始メテ囊腫ノ疑ヲ起シタリ、此迄ハ膿瘍トノミ考ヘタリト云フ(宮田學士ノ通信ニヨル)

患者ハ左ノ鼻涙管狹窄及涙囊炎ノ鼻内手術ヲウケムガタメニ同學士ノ紹介ニテ予ノ許ニ來レルモノナリ。從來眼科醫ノ許ニテ鼻涙管ノ消息法ヲナシ居レリト云フ。

〔現 症〕

左右共ニ鼻唇溝消失シ鼻翼附近膨隆ス、鼻腔ヲ檢スルニ左右トモニ鼻孔ノ外下隅ニ當リ即チ鼻底及外側壁ノ一部圓形ニ隆起シ下甲介ノ一部ヲ被フ。右側ノ口腔粘膜、犬齒窩部ニハ宮田學士ヨリ受ケタリト云フ切開及搔把ノ創口ノ瘢痕性ニ治シタル所アリ少シク粘膜肥厚ス鼻中隔ハ少シク右彎ス。

左側鼻涙管ニ令屬消息子ヲ通ジタルX光線寫眞ニヨリテ檢スルニ消息子正シク左側鼻涙管ヲ通ジテ下鼻道ニ達ス、右側腫瘍ノ存スル部分ニハ腫瘍ニ相當シテ圓形ノ暗影アリ、骨緣ノ壓平著シカラズ(第十一圖)

九月二十二日先患者ノ主訴スル左側鼻涙管狹窄症及涙囊炎ノ鼻内手術ヲ行フ。

〔診 斷〕

兩側性上顎粘液腺囊腫、左側鼻涙管狹窄症及涙囊炎

〔手 術〕

第一回、右側粘液腺囊腫、局部麻醉ニテ行フコト前回ノ如シ、唯一回切開搔把ヲウケタ

原著 久保——上顎性粘液腺囊腫(新稱)ニ就キテ

第十一圖 (五十五歳ノ女) 左側鼻淚管狹窄ニ消息子ヲ挿入シタルモノ、
一回ノ手術ニテ瘢痕性トナリ肥厚シタル囊腫壁、(↑)

ルコト故、粘膜トノ癒著烈シク剝離困難ナリキ。サレド内面、後面及下面ニ於テハ剝離比較的容易ナリキ、鼻底ノ粘膜ノ腫瘍壁ニ密著スルコトハ前ト異ナラズ。

〔腫瘍〕 長楕圓形ニシテ重量二、一「グラム」上下一、六左右一、三前後二、〇大ナリ。内容ハ粘稠、混濁セル液ナリ。

醫化學教室ニ検査ヲ求メタルニ其成績次ノ如シ

- 一、材料乾燥シタルニツキ定量ハ不可能、
 - 一、先二十倍ノ水ヲ加ヘ苛性曹達液二—三滴ヲ加ヘ可溶性トナシ全部溶解シテ濾過ス
 - 一、濾液ヲ試験管ニ少量取リ醋酸ニテ中和ス。
 - 一、ヘルレル氏反應ヲ行フニ陽性ナリ。
 - 一、煮沸反應ヲ行フニ同ジク陽性ナリ。
 - 一、醋酸塩鹽試験モ強陽性、但之ハ「ムチン」モ蛋白モ共ニ出來ル。
 - 一、醋酸ニテ中和シヨリ以上ニ醋酸ヲ加ヘ酸性トナセバ濁濁ヲ増ス、コレ「ムチン」ナリ。
- 以上ノ事實ヨリ

一、粘液素ヲ含ム、一、蛋白素ヲモ含ム、但被檢液ガ血液ヲ含有セルコトヲ顧慮スベシ。

組織検査ヲ爲シタルニ囊腫ノ内面ハ不規則ナル上皮層アリ所々斷絶ス、粘液變性ヲナシタル細胞多シ、ソレヨリ外層ハ圓形細胞ノ浸潤多シ。周圍ハ結締組織纖維増殖ス、此像ハ前ノ同ジク粘液腺ノ擴張セルモノナリ。

第二回手術、左側手術、式及注意前ノ如シ。

鼻腔粘膜ト接スル部分ヲ除ケバ剝離容易ナリ。

〔腫瘍〕

拇指頭大、楕圓形ニシテ内容ハ白色混濁セル濃厚ナル液ナリ、膿球ノ如キモノヲ含ム。

醫化學ニテ検査ヲ乞ヒタルニ蛋白質モ粘液質モ含有セズ、脂肪變性ヲナシタル物質ヲ含ミタルト云フ。

組織的検査ヲナシタルニ囊腫内面ハ二乃至三層ノ方形上皮細胞ヲ以テ被レ腺ノ擴大シタルモノナルコト疑ヲ容レズ。

〔概要〕

此例モ亦兩側性ノモノニシテ發生部位及形狀全ク特有ナリ、殊ニ右側ハ一回切開搔把ヲウケタルニ拘ラズ再發腫脹シタリ、宮田學士ノ見タル如ク口内創口治スルヤ直ニ鼻内腫瘍ノ増大スルコト、始メ膿性分泌物漸次澄明トナリ粘液性トナリタルコトハ粘液性囊腫ナルコト疑ナシ、シカモ化學的及組織的検査ニヨリテ粘液腺ノ囊腫ナルコト確實ナリ、左側ノ囊腫内容ニ粘液素ヲ證明シエザリ

シハ粘液ノ分泌ヤミテ内容ノ脂肪變性ヲ起シタルニヨルカ、記シテ疑トナス。

此患者ガ始メニ疼痛ヲ感ジタルハ急速ニ囊腫ノ増大シタルガ爲ナラム。

結 論

以上ノ諸例ニツキテ觀察シタル點ヨリ予ハ新ニ命名シタル上顎性粘液腺囊腫ノ一般ヲ記載スレバ次ノ如シ。

第一、症狀

自覺的 患者ハ自覺的ニハ何ノ訴ナクシテ他ヨリ鼻翼附近ノ腫脹ヲ注意セラレテ始メテ氣付クトアリ又患側ニ於テ鼻唇溝ノ消失ヲ認識スルモノアリ、疼痛ハナキヲ常トスレドモ初期ニ當リ又ハ或原因ニテ急ニ増加スル時ハ自發的又ハ壓迫ニヨリテ疼痛存スルコトアリ、腫瘍ノ増大スル時ハ鼻腔ノ前方ヲ閉鎖スルガ故ニ鼻閉ヲ訴フ又頭痛ヲ訴フルコトアリ、一旦試穿又ハ切開ヲ受クル時ハ粘液ノ漏出永ク持續シテ不快ナルコトアリ。

他覺的

一見シテ鼻翼部及鼻唇溝部ノ腫脹ヲ知ルベシ、鼻唇溝ハ必ず消失ス、兩側ニ來ル時ハ兩側ニ此症狀アリ此時指頭ヲ以テ鼻頭ヲ擡グル時ハ鼻唇溝ニ當リテ皮膚下ニ橢圓形ノ腫瘍輪廓ヲ觸ルルコトアリ此腫瘍ハ鼻腔ヨリト口腔内ヨリト檢スルコトヲ得ベシ偏側ニ來ル時ハ鼻尖ハ健側ニ曲ルコレ

鼻唇溝部ノ腫脹ニヨリテ患側ガ持チ上グラル。爲ナリ、

鼻腔ヲ檢スルニ鼻孔ノ外下隅ニ當リ下甲介前端部ヨリ鼻底ニカケテ圓形ニ隆起トナリテ現ル、其表面ハ淡紅色ニシテ健康粘膜ト大差ナシ時トシテハ壓ノ爲ニ蒼白色ノコトアリ、此隆起ハ齒牙囊腫ニ於ケルゲルベル氏隆起ニ酷似ス、サレド少シク前方ニ位スルヲ知ルベシ、此隆起ハ鼻底粘膜隆起ト下甲介トノ間ニアルヲ常トシ下甲介ノ一部ハ爲ニ被ハレテ見エズ其増大スルヤ鼻底全面ニ擴リ鼻中隔ニ接スルコトアリ、又下甲介ヲ上方ニ壓迫轉移セシムルコトアリ、時トシテハ前方ニ位シ前庭部ニ達シ鼻孔ノ直後ニ見ユルコトアリ此隆起ハ鼻頭ヲ指ニテ上方ニ擡ゲタルノミニテ見ユルコトアリ、

口腔ノ方ニハ口唇ヲ舉上スレバ圓形ヲナシテ犬齒窩部ニ現ル、コトアリ觸診スレバ更ニ確ナリ。是等ノ腫瘍露出面ハ可ナリ緊張スルモ之ヲ壓スルニ柔カク感じ毫モ骨壁ヲ觸レズ羊皮様音ヲ聞カズ多クハ明了ニ波動ヲ感ズ、壓痛アルコトアレドモ無キヲ常トス、皮膚及口腔粘膜トノ間ハ移動ス、瘻孔ヲ有スルトキハ黃色又ハ帶黃綠色ノ溷濁シタル粘稠ナル液ヲ漏ス、探診スレバ囊ヲ探ルコトヲ得、

第二、病因及病理

此腫瘍ハ皮膚及粘膜ノ直下ニアリ骨ノ上ニ存シ骨ト直接ノ連絡ナシ、故ニ剝離スル時ハ骨ヨリモ周

圍ヨリモ容易ニ剝離ス唯鼻腔面ノ粘膜トハ固著シテ剝離スルコト能ハズ、腫瘍ヲ去リタル後ニ骨面ヲ検査スレバ梨子狀孔ノ下縁ノ尖鋭ナルベキ邊緣ハ壓平セラレテ臍狀ニ凹陷シ邊緣ガ二重トナリ一ハ後方鼻底ノ方ニ退ク、但上顎竇ト連絡スルコトナク又骨ノ内面ト關係スルコトモナシ、故ニ鼻腔面ノ粘膜ヨリ出發スルコトヲ推論シ得、

シカラバ腫瘍ノ組織的關係ハ如何ト云フニ全ク粘液腺ノ囊腫ニシテ内面ハ腺細胞ノ壓平セラレタルモノヲ一、二又ハ三層整列スルヲ見ル、又附近ニ腺ノ尙健在スルモノヲ見ル故ニカ、ル囊腫ハ單房ナルヲ常トスレドモ多房性ノモノモ存スベキコト明カナリ。

此粘液腺ハ何レニ屬スルモノカト云フニ健康體ノ鼻腔粘膜ヲ下甲介前方ニ當ル部ヨリ取りテ検査スルニ多數ノ粘液腺ノ存在スルヲ見タリ故ニ此部ノ粘液腺ヨリ出發スルコト疑ヲ容レズ、

囊腫ノ内容ハ粘稠ナル濁濁セル液ニシテ或ハ黃色或ハ帶黃綠色或ハ白色ナルコトアリ、一度切開シテ更ニ滯溜シタルモノハ純粘液ニシテ透明ナリ故ニ黃色ヲ呈スルモノハ感染シタルモノナラム、感染經路ハ鼻腔ノ腺開口ナラム、

之ヲ鏡檢スルニ細菌學のニハ重球菌ヲ證明スルコトアリ無菌ナルコトアリ、形態學のニハ赤血球、多核性白血球、單核性白血球、多角性上皮細胞等ヲ見ルコトアリ、コレステアリンノ結晶板ヲ見ズ、

之ヲ醫化的ニ檢スルニ「ムチン」(粘液素)ヲ主成分トシ蛋白質ノ少量ヲ含有ス、時トシテ脂肪變性ヲ呈スルコトアリ、

腫瘍ノ發生スル年月不明ナルモノアリ、其明ナルモノハ一年乃至二三年乃至五年前ヨリ注意スルモノアリ慢性ノ經過ヲ取ルコト明カナリ、男女ニ關シテハ六人ノ内五人婦人ニシテ一人男子ナリ、年齡ニ關シテハ二十歳ヨリ三十歳ノモノ三人三十歳ヨリ四十歳ノモノ二人五十歳以上ノモノ一人ナリ、患側ハ右ヲ主トス兩側性ノモノノミ左側ニモ來レリ、予ハ此等ノ關係ヨリ鼻腔ニ異常アルモノガ右ノ指頭ヲ以テ右側ノ鼻翼及鼻唇溝部ヲ弄スル習慣ガ關係スルニアラズヤト思フ(第四例五例ノ婦人ノ習慣ノ如シ)上顎竇炎、肥厚性鼻炎、鼻中隔彎曲症等何レモ外鼻附込ニ異常感ヲ起スモノハ間接ノ原因ナルベキカ、

右側ニ來ルヲ常トスレドモ兩側性ノコトアリ(六人中二人)

腫瘍ノ大サハ小指頭大ヨリ拇指頭大ニ至リ時ニヨリテハ直徑二、九仙米大、重量六、九「グラム」ニ達スルコトアリ(第四例)其形多クハ楕圓形又ハ圓形ニシテ骨面ト外皮トノ間ニ適合スル爲ニ少シク扁平ス、

第三、豫後

良性ニシテ何等苦痛ヲ感ゼザルモノナレドモ其増大スルニ至リ鼻尖ヲ曲ゲ鼻唇溝ヲ失シ、整容上顧慮スルニ至ル且鼻閉ヲ來シ頭痛等神經性症狀ヲ訴フルニ至ル、
穿刺及切開ニテハ再發ヲ免カレズ、

第四、診斷

以上述べタル所ニ注意スレバ診斷困難ナラズ、齒牙囊腫ニ最モヨク類似スルヲ以テ從來ハ此中ニ葬ラレタルガ如シ故ニ人ノ特ニ注意シタルモノナカリシナラム、

一、齒牙囊腫トハ腫脹ノ位置コトニ鼻内ニオケル隆起ノ位置甚ダ類似スルモ齒牙囊腫ヨリモ前方ニ位セルヲ常トス、カツ觸ル、ニ柔カク波動アリ、齒牙囊腫ノ如ク羊皮紙樣捻髮音ヲ呈スルコトナシ、又齒列及口蓋ニ異常ナシ、及穿刺法ニテ内容ヲ檢スレバ更ニ確實ナリ、

二、微毒性骨膜炎ニテ鼻翼附近ノ骨膜腫脹シ外觀上類スルコトアルモ鼻内ニ特有ノ腫脹ナシ、又ワ氏及應ハ囊腫ニテ陰性ナルコト多シ、又病歴及驅梅毒法ニヨリテ容易ニ區別シウベシ、
三、粉瘤腫、鼻翼附近ニ生ズルコトアルモ此ハ皮膚ヨリ發生シ鼻腔内ト關係ナシ、

四、瘻瘡ハ急性ニシテ疼痛アルヲ以テ誤ルコトナカラム、之ヲ要スルニ齒牙囊腫トノ區別ヲ第一トス時トシテハ徹照法及X光線検査ニテ明白ナルコトアリ、

原著 久保——上顎粘液腺囊腫(新稱)ニ就キテ

一 吳 一

徹照法ニテハ囊腫内容ノ濃厚ナル爲暗影ヲ與フルヲ常トス又光線ニテモ暗影ヲ與フ、コトニ一回手術シタルモノヲシカリシトス、且齒牙囊腫ニ於ケルガ如ク齒牙ヲ見ルコトナシ、又梨子狀孔ノ骨邊緣ノ壓平及菲薄ヲ明ニ認メウルコトアリ、

第五、治療

根治的ニ摘出スルヲ最良トス但初期ニ於テハ溫罨法ニテ消退スルコトアラムモ予ハカノル初期ノモノニ遭遇シタルコトナシ、

手術ハ局部麻酔ニヨルコト上顎竇根治手術ニ於ケルガ如シ、切線モ口嚢ノ中央ニ横ニオクコト上顎竇ノ根治手術ニ於ケルガ如クス唯横切線ノ前端ヲ口唇緊帶ノ所ニ進メ後端ヲ犬齒邊ニト、ム、切線ヲ深クスル時ハ淺在性ノ囊腫ヲ傷クルヲ以テ淺ク切り囊壁ヲ剝離ス鼻腔粘膜ハ剝離スルコト不可能ナルヲ以テ壁ト共ニ缺ニテ切斷シ去ル、上顎竇ハ開ク要ナシ、切線ハ初期縫合ヲナス、鼻底部ノ創口ニハ「グイオフタルム」吹粉、ガーゼヲ挿入ス鼻孔ヨリ出ス、三日ノ後、拔糸、鼻腔ノ「ガーゼ」ヲ數回交換ス、始メ凹陷ヲ生ズルモ肉芽上リテ平等トナリ上皮ヲ以テ被ハル、ガ故ニ患フルニ及バズ、經過ハ極メテ良好ナリ、而シテ前ニ醜形ヲ呈シタル鼻唇溝消失モ回復シ、鼻尖モ原位ニ復シ整容上モ良結果ナリ、(前ノ圖ヲ參照スベシ)

第六、命名

予ハ以上ノ記載ヲ以テ一新種ヲ紹介スルニ十分ナリト信ズレドモ命名ノ適否ヲ斷ズル能ハズ、始メノ間ハ腺囊腫 (Drüsenzyste) ト呼ビタルモ不明了ナル嫌アルヲ以テ粘液腺腫 (Schleimdrüsenzyste) ト訂正シタリ、發生上ヨリ云ヘバ鼻腔粘膜ナレドモ上顎骨ノ下ニ居ラ占メ犬齒窩部ニ向テ擴ルガ故ニ上顎性粘液腺腫、 (Schleimdrüsenzyste des Oberkiefers od. maxillare Schleimdrüsenzyste) ト呼ベシ至當ト考ヘタリ、

原 著

久保 一 上顎粘液腺囊腫 (新稱) ニ就キテ

二 十 一

原著

久保——上顎粘液腺嚢腫（新稱）ニ就キテ

一六四